

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 8 日現在

機関番号：10103

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2015

課題番号：24520561

研究課題名(和文) 研究室コミュニケーションの円滑化をめざす日本語会話教材開発

研究課題名(英文) Developing Learning Materials to Facilitate Communication in the Japanese Language between International Students and Others at and around the Laboratory

研究代表者

山路 奈保子(YAMAJI, Naoko)

室蘭工業大学・工学(系)研究科(研究院)・准教授

研究者番号：40588703

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,200,000円

研究成果の概要(和文)：研究留学生の研究室環境における日本語によるコミュニケーションを支援する教材を開発して中級会話コースで試用し、コース終了後、受講者に調査紙および聞き取りによる調査を行って教育効果を検証した。教材では、ゼミ・研究についての相談・学生同士の雑談など、研究室環境での典型的場面を取り上げたが、調査の結果、受講者の会話を始動する意欲と回数が増加し、かつ、使用されている日本語表現の観察が活発化しており、研究留学生の研究室環境におけるコミュニケーションの円滑化に寄与していることがわかった。

研究成果の概要(英文)：In order to promote international students' communication in Japanese at and around their laboratories, we developed learning materials to use for intermediate conversation courses, and examined the effects at the completion of the courses through a questionnaire and interviews. The results showed that our materials, which include typical laboratory scenes such as seminars, discussions about research, and small talks among laboratory members, contributed to facilitating the international students' communication in terms of increasing their motivation for and trials at conversation, as well as promoting their active observation of the language being spoken.

研究分野：日本語教育

キーワード：研究留学生 研究室コミュニケーション 初中級レベル会話

1. 研究開始当初の背景

研究室に所属し研究活動を行いながら日本語を学習する留学生は、日本語学習に充当できる時間が限られている。初級コース終了後は多くの場合週1回程度の中級コースで学習を継続することになるが、彼らのニーズに合致した教材がなかった。市販教材の多くは中級以上では「読み・書き」に必要な書き言葉的表現や「発表の方法」などの独話的でフォーマル度の高い口語表現を中心に扱っている。しかし、特に研究上の受信・発信自体には英語を用いている留学生の場合、日本語が必要なのは日常会話においてである。日常会話で使用される表現は、初級で提示される規範的な用法とは異なっている場合が多い。また日本語でのインターアクションが増えるほど母語話者との間にある語用論的・社会文化的相違に起因する誤解や混乱が生じやすくなる。その結果、学習者は「学習した日本語が役に立たない」などといった不満を抱き、学習を中断するケースも多く見られる。

2. 研究の目的

基礎的な日本語学習を終了したレベルで研究室に配属されている留学生が、指導教員や研究室の学生、その他研究上で関わる人々との間で生じるコミュニケーション上の困難とその要因を探求し、語用論的・円滑なコミュニケーションを行うための支援となる教材および教育方法の開発を行う。

3. 研究の方法

(1)留学生および指導教員に対するインタビュー調査の実施：理工系専攻の研究留学生・元留学生と、留学生を多く指導する教員に対し、日本語の使用状況や日本語力の必要性の認識、日本語教育への要望などを尋ねるインタビューを実施し、日本語使用に関するニーズの把握を行った。

(2)会話データの収集：所属する研究室の異なる研究留学生10名にICレコーダを貸与し、ゼミや研究打ちあわせ、雑談等さまざまな種類の会話を録音してもらい、基礎データとした。

(3)会話データの分析と学習項目の選定：収集した会話データのなかでも特に学習者による理解が困難であったものについて、言語形式面と語用論的・社会言語学的側面の両方から原因分析を行った。その中でも特に汎用性の高い言語表現や場面を抽出して学習項目の選定を行った。

(4)教材の作成：会話データの分析結果をもとにモデル会話とタスクを作成し、週1回授業で通年の使用に適した分量の教材を作成した。

(5)試験授業の実施と教育効果の検証：作成した教材を用いて試験授業を行い、教室活動の観察、インタビューテスト、留学生による評価アンケートなどさまざまな面から教育効果の検証を行った。

(6)教材の改良：試験授業による検証結果に基づき、モデル会話やタスクの改良を行った。

4. 研究成果

インタビュー調査では、英語で研究活動を行う前提で来日した学生も含め、日本語の習得が生活の利便性向上や周囲の日本語話者との関係構築を促すのみでなく、研究に関連する情報収集や将来の可能性を広げるためにも重要であると認識されていることがわかった。留学生を指導する教員の多くが「生活や友だち作りのためには日本語が必要だが、研究上は必要ない。研究で使うとしても、特別な手当がなくても何とかなる程度」と考えている一方で、留学生自身は、自分の研究の質を高めるためにも日本語で受信・発信することを望んでいることが窺えた。研究活動が英語主体という学生であっても「ふだん英語を話す教員も『英語で何と言うか忘れた』と言って専門的な内容の話に日本語を用いる場合がある」「研究チームの先輩は実験を日本語で指示するので、理解できなくて困ることがある」といったように、日本語での理解力が求められる場面にしばしば遭遇し、研究上でも日本語によるコミュニケーションが必須であるという認識に至ったケースが多く見られた。またゼミ発表を英語でやっても伝わらず質問やコメントをもらうことができないという現実に直面し、英語から徐々にでも日本語にするなど、意識的な努力を行っていることが窺えた。

日本語教育の内容と方法に関しては、初級終了後も学習を継続するためのモチベーション維持が困難であるという指摘が複数の元留学生からあり、その要因として、初級学習の内容と現実に接する日本語との齟齬が大きすぎた、日本の大学で履修した中級コースの内容が一般的過ぎて自分には役に立たないと感じられるものであった等が挙げられた。研究留学生に対する初級での教育内容について見直しが必要であることが示唆されるが、それと同時に、一般的な初級で日本語の基礎的知識を学習した研究留学生にその基礎知識を研生活のコミュニケーションに生かしていく技能を養成する教育を行う必要があることが示された。

インタビュー調査と並行して会話データの収集・分析を行い、それらの結果をもとに、週1コマ程度の初中級コースでの使用を想定した、理工系の大学院留学生を主対象とした会話教材を試作した。2012年度の日本語コースにおいて最初に試用し、年度ごとに改良を加えつつ2013年度、2014年度と3度にわたる試験授業を経て2014年度末に本研究の最終成果物としての教材『研究留学生の日本語会話』の印刷・製本を行った。併せて2014年度末に英語・中国語翻訳版、2015年度にタイ語・韓国語版を作成した。

『研究留学生の日本語会話』は研究分担者の一人(因)が中心となって週30時間の初

級集中コースでの使用を想定して開発した教材『研究留学生の日本語』をベースに週1回程度の初中級コース用の会話教材として新たに編集しなおしたものである。ベースとなった教材の「一般的には初級で扱われない項目であっても、研究留学生が遭遇すると思われる言語的素材をなるべく多く取り入れ、そのかわり完全学習を求めない」という基本方針を踏襲し、理工系の研究室で多く用いられると思われる専門基礎語彙を既習の初級レベルの文法項目や文型に当てはめて発話する活動を提供するものとした。新たな文法項目や表現の導入は最小限にとどめ、文法項目についての意識化・強化は限られた項目に絞りを絞り、余裕のある学習者には自分で他の項目についての復習、発展を行うよう促すという方針を取った。教材の構成は全11課で、各課は基本的にモデル会話とその中に使用される文型・表現の習得のための基本例文と練習問題からなる。全体を11課としたのは週1回で前後期それぞれ15週という標準的授業回数で通年で終了することを想定したものである。

教材を使用した授業における教室活動は以下のように行った。一つの課は原則として2~3回で終了させた。1課の活動はモデル会話聴解クイズ クイズの答え合わせを兼ねた簡単な内容確認 各文法項目の説明と基本例文による確認、練習問題 モデル会話の詳細な説明 モデル会話の練習、という順に進めた。教材はまとめて配布せず、ひとつの課が終わって、次の課のモデル会話聴解クイズを行った後に、次の課のテキストを配布した。

授業への観察状況から判断すると、本教材および本コースは受講者に支持されたと考えられる。受講者の日本語レベルにはばらつきがあり、レベルが合わない場合には途中で受講を停止することもあり得たが、いずれの年度・学期においても初回授業に参加したほぼ全員が最終回まで受講を続けた。

モデル会話の選択については、受講者の実情に適合したものであることが確認された。導入時に行うモデル会話聴解クイズでは、途中で笑いが起こることがしばしばあった。ゼミでの発表後に先輩からの厳しい質問攻めにあった学部生が音を上げる場面や、指導教員が台風が来てもゼミを中止にしないことを嘆く場面などである。いずれも、研究室に所属する学生たちにとって「身につまされる」場面だからであろう。

教室活動も、受講者のモチベーションを高めたと思われる。多様なレベルの学生に可能な限り対応するため、変換練習のような単純なドリルを行う一方で、複数の文型を組み込み専門語彙が含まれる高度なタスクも行なったが、教員から観察する限り、どのレベルの学生も熱心に取り組み、易しすぎる/難しすぎるという拒否感を示すことはなかった。

アンケートおよび聞き取り調査での回答

でも、教材全体への評価は概ね高かった。「この本の内容はとてもいいと思います。私たちは日常生活で使いできる場合が多いです(博士前期課程、機械系専攻、中国)」など、研究室での日常に沿った内容であることが支持された。

モデル会話については、実際に研究室で耳にする表現や必要となる表現が取り入れられており役に立つと評価された。特に、発表についてアドバイスを受ける場面(第5課)への支持が最も多く、<複雑すぎてわかりにくい><もうちょっと大きくしたほうがいい>などの表現を具体的に挙げ「ほかの日本人としゃべるのとき、たくさん使います(博士前期課程、機械系専攻、中国)」などと述べる学生が複数あった。交通機関についての情報を求める第2課、ゼミ発表で質疑応答をする第3課にも支持が集まった。

モデル会話中に現れる定型的表現の有用性を強調する学生もあった。特に、<ちょっと聞きたいことがあるんですけど、今いいですか><ちょっと教えてくださいませんか><勝手なことを言って申し訳ないんですが>といった前置き表現の支持が高かった。質問や依頼に先行する定型的な前置き表現は、初級でも学習しているはずであるが、研究室という具体的場面で示されることで有用性が認識されやすくなったと考えられる。あるいは、会話レベルの向上に伴い、初級段階では必要とされなかったコミュニケーションストラテジーが要求されるようになってきたことに対する学生自身の意識の表れかもしれない。

初級後半レベルの文型を専門基礎語彙とともに提示する方針も適切であると判断された。文型については、初級レベルの学習が完全には終わっていない段階で参加している学生では「難しい」との回答もあったが、それ以上の学生の場合は「学校で日常に実験も研究もよく使っている文法です。難しくないけど、でも、日常で自由に使ったほうが(使うことが、の意か)簡単じゃないです(博士前期課程、化学専攻、中国)」など、既習の文型を彼らにとっての日常生活という文脈の中で運用する練習を行うことが有用だと認識されていた。語彙については、当初、非漢字圏出身の学生の一部に「難しい」という意見があったが、後述するように英訳を挿入したり、自習用に翻訳版を配布したりすることでおおよそ解決された。分野による使用語彙の違いは問題にならなかった。「高校のとき、化学はみんな全部勉強したことがありますから、(中略)大丈夫です。少し専門の名詞、『漂白剤』とか、名詞が少しだけ、大丈夫です。(博士前期課程、情報系専攻、中国)」など、自身の分野には直接関わらない語彙があっても特に難しいと感じないという回答であった。むしろ、「日常生活にあまり使っていない単語があると、日本語の勉強に役に立ちます(博士前期課程、公共システム専攻、

中国)(聞き取り調査で確認したところ、日常の言葉は日常で覚えられるから、頻度は少なくても聞くことがある専門的なことばを勉強したいという趣旨のことを語った)」など、歓迎する意見もあった。

一方で、聞き取り調査では、試作教材では満たされなかったニーズも判明した。試作教材ではモデル会話のほとんどが丁寧体によるものであったが、学生同士の会話に現れる口語的言い回しを理解したいという要望が強かった。また、自習のため、特に語彙力強化のための資料や課題がほしいという声もあった。

これらの調査結果をもとに、最終版には以下に挙げる改善を加えた。(1)モデル会話の一部を普通体に変更し、縮約や口語的表現をより多く取り入れた。また提示する例文を書き言葉の表現から口語的表現まで、より幅広いものとし、それらの使い分けを明示的に認識できるようにした。(2)抽象度が高く理解が難しい例文や練習問題を差し替え、必要に応じて単語の英訳を添えて練習時における語彙理解の負担を減らした。(3)会話文および例文の英語・中国語・韓国語・タイ語翻訳版を作成し、理解を容易にするとともに自宅学習も可能にした。

初級で学習した基本文型と専門基礎用語を用い、研究周辺活動におけるモデル会話を提示するという方針は、現実の研究室での日本語コミュニケーションの渦中にある留学生たちから高い評価を得、支持された。本研究で開発した教材は今後も継続して使用し、さらなる改良を加え、また自律学習を支援するための副教材等の充実を図っていく予定である。また、本研究では初中級レベルの会話コースで使用する教材の開発を行ったが、本研究で得られた知見を入門コース向け教材や上級用教材などさまざまなレベルの会話教材の開発に生かしていきたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔学会発表〕(計6件)

山路奈保子・因京子・アブドゥハン恭子、英語で研究活動を行う留学生・研究者のための「サバイバル日本語」- シラバス再構築に向けて、専門日本語教育学会第18回研究討論会、2016年3月4日、京都産業大学(京都市)

高木佳奈・山路奈保子、口頭運用能力の差をもたらす環境的要因の分析 日本語コース終了後の研究留学生を対象とした追跡調査から、日本語教育学会2015年度秋季大会、2015年10月11日、沖縄国際大学(沖縄県)

高木佳奈・山路奈保子、自律的学習スタイルを獲得するうえで学習者が抱える問題 日本語学習者へのインタビュー調査から、

2014年度日本語教育学会秋季大会、2014年10月12日、富山大学(富山市)

山路奈保子・因京子・アブドゥハン恭子、『英語コース』所属研究留学生の研究室適応と日本語使用状況、専門日本語教育学会第15回研究討論会、2013年3月2日、長崎大学(長崎市)

山路奈保子・因京子・アブドゥハン恭子、工学分野の大学院留学生の日本語ニーズインタビュー調査と試用教材への評価から、2012年度日本語教育学会秋季大会、2012年10月12日、北海学園大学(札幌市)

山路奈保子・因京子・アブドゥハン恭子・徐燕・黄英哲、学術的活動における日本語使用の実態と支援ニーズに関する質的調査 大学院留学生・帰国留学生と専門分野教員を対象に、日本語教育国際研究大会2012、2012年8月18日、名古屋大学(名古屋)

〔図書〕(計1件)

(1) 山路奈保子・因京子・アブドゥハン恭子、室蘭工業大学国際交流センター、研究留学生の日本語会話(2015年版)、2015年、総ページ数150ページ

6. 研究組織

(1) 研究代表者

山路 奈保子 (YAMAJI, Naoko)
室蘭工業大学・工学研究科・准教授
研究者番号：40588703

(2) 研究分担者

因京子 (CHINAMI, Kyoko)
日本赤十字九州国際看護大学・看護学部・教授
研究者番号：60217239

アブドゥハン恭子 (APDUHAN, Kyoko)
九州工業大学・工学研究科・教授
研究者番号：00184630

(3) 連携研究者

()

研究者番号：

(4) 研究協力者

高木佳奈 (TAKAGI, Kana)
久留米大学・非常勤講師
研究者番号：50770187